

# 白百合

松岡隆子

中谷信子さん

痛恨や白百合いくつ手向けても  
空席は空席のまま百合の花  
蓮池の遙かは風の吹くばかり  
一人づつ蓮を見てゐる悼みかな  
夕風の戦ぎ全き晩夏の樹  
雨あとの風すぐ乾く凌霄花  
凌霄の落花の嵩を雨が打つ

すれ違ふ人に草の香夏深し  
草々の雨踏んで夏惜しみけり  
ゆゑもなくさみしき時を秋の蝉  
夕雲のたひらなりける終戦日  
秋蝉の声の中なる禱りかな

今月の作品を纏めようとペンと句帳をもって電車に乗った。最寄りの駅から石神井公園までは急行だと一駅である。公園については四時近く、日中の暑さは避けたつもりなのにまだかなり暑かった。公園は秋の蝉時雨に包まれていた。みんなの声とつくつく法師の声が交錯してシンフォニーを奏でていた。三宝寺池に辿りついたときには日差しも和らぎ池には涼風が立ちはじめた。ふいに森の奥からひとときわ澄んだ蜩の鳴き声が響いてきた。その哀調を帯びた鳴き声に遠くへ行ってしまった人々が頻りに偲ばれた。